

後藤靜香選集

第五卷

善本社

刊行のことは

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。

彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスペラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集 第五卷

学窓の彼方・若人の道・人間道中・自著批判

一九七八年五月十日 初版

著者 後藤 静香

発行者 山本三四男

企画編集 後藤静香選集刊行会

代表 中山 隆祐

〒160 東京都新宿区高田馬場一―二三―一二

振替 東京〇―一二二九〇

発行所 株式会社 善本社

東京都千代田区神田神保町一六〇

電話 東京 二九四―五三一七

〒101 振替 東京 九一―一九五五七

印刷 花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえいたしません

学窓の彼方

序

男女の学生諸君を心から愛し、親しみをもって、何のへだても気がねもなく、思うがままに語る。あるいは壇上より、あるいは共に歩きながら、あるいは蚊やり火のかけに寝ながら、時には同じコタツで番茶を飲みつつ。あるいはたった二人でさし向い……しかも、あなたの部屋で。こうした気持のものばかり。

私の眼で見て、私の心にふれて、私自身で渡って来た学窓の彼方、そこで諸君によい仕事をしてもらいたく、そこに役立つ諸君であってもらいたく、何かとお話をする。これがこの書物の内容である。

何々を論ず……といったようなものはない。何々主義研究もない。いつでも、私の心からほとばしり出たままのもの、珍しさもなかり、耳あたらしさの何ものもあるまい。それでも、読みかけたら、恐らく放されぬものであろう。諸君が私をすてても、私は諸君をすて得ない。

きつと、何かをつかまれる、こう信じて敬愛し、信頼する学窓の若き友におくる。

昭和六年五月

高雄山にて 後藤 静香

学窓の彼方

まだ知らぬ

学窓からも世の中が見えないではない。しかしそこから見たものと、その実際とはあまりにもちがっている。諸君はまだほんとうの姿を知らぬ。かく言うとき、その知らぬ彼方をなんと想像せられるか。美しくか、それとも、もっとみにくくか。

判断をあやまる

この見方が非常にちがっている。世の中の表に現われたものを見ると、これはもう、諸君を失望させるものばかり。しかし果してそれが真の姿ならば、学校時代に学ぶ修身科——実に、小学校入学以来いかにもったいらしく学ばされたことの一切が、みんなうそになるではないか。

軽蔑するな

大人のつくっている社会、そこにはいくたのみにくさもある。不完全さもある。不正も不徳も平然として行われ、正しいものがかえってバカをみた形になっている。そこで、たいていなものは、この社会

にたいし、本気で真面目にとびこむ氣になれぬ。バカにしてかかる、軽べつする。實際そうしたくなるのが人情である。ところが、この一点に根本のあやまりがある。

厳然たるもの

一度人生の深さを知るとき、それはけつしてバカにしたものでない。道がないようで、しかも厳然たる道があり、世間なみにいう道徳以上の道徳律が、知らずしらずの間に行われている。

軽べつしたつもりの人間が、かえってその社会からとらえられている。修身科の全部が生きて動いている。

燦然たるもの

さらに立入って、世の姿を見るとき、そこにはうるわしい人々のうるわしい努力が、かぎりなく見出される。夜の星のように、燦然としてかがやいている。

おおいなる悦び

学窓の彼方、そこに、働きがいあり、生きがいある社会があり、真人を求めに求めていることを知るは、実におおいなる悦びである。それでこそ、学生時代を本気ですごす氣になれる。このことの悟りがないならば、勉強しても、成績が何であつても、それは点取り虫の芸当にすぎない。

待っている

人があまるといふ、職がないという。それはまちがいである。ただこれまでのような考えで、人のつくった畑にそのまま立って、人の用意した鋤鎌だけで働こうとすればこそ、畑も足るまい、道具も足るまい。人生觀をつくりかえて出ねばならぬ。すなわち、いかにして、世の欠陥をおぎない、人の苦勞を助け、國を益し人を幸福にしうるかと、身を低うして働きの庭に出るとき、まだまだたがやされねばならぬ荒野が、いくらでもある。ほとんどどの社会もこの荒野で満ちているといつたらしい。

見たら分かる、どこに心持のいい緑の野があるか、希望にかがやいた沃野があるか。花の咲きみだれた庭で楽しんでゐる人々が、何ほどあるか。

質の悪い酒でよっぱらつてゐるような人間たちの群はあろう。しかし、本当の悦びの中に、希望をもつて生きている社会が、どこにあるか、政治の畑にか……あの毒草茂つたところにか？ 実業の畑にか、金、金、金と血眼になっているところにか？

教育界に花が咲いているか、宗教の畑には？

こう考えるとき、どこも、ここも、ただ何とかしてくれる人を求めに求めている。しかも、誰か本当にやってくれたら、心から悦んで助力する。諸君は、こんな社会へ出かけるために、今の今をいかに送ればよいのか。

余言か、予言か

私は、この書物で語ることのほとんどすべてが、一度『光と声』か、または『学徒』などで発表したものである。それはいつも、よけいなこととは思いつつながら、黙っていられず話してきたことであつた。なにゆえによけいなことというか。

申すまでもなく、諸君には、諸君自身の家庭がある。学校には諸君自身の教師がある。さらにいくたの教科書があり参考書がある。この上に他から何か言おうとする。すなわちおせっかいであり、余言である。

余言とは知りつつも、語らざるをえずして語る。そこに命がある。そうして、私も、学校教育に長い経験があり、現にわれ自ら創設した学校をもち、五人の子の親となつてゐる以上、この余言がまったく無益ではあるまい。あるいは、余言の中に、諸君の生涯にたいする若干の予言がふくまれているかも知れぬ。

各種の題目

学窓の彼方をかえりみながら、各種の題目で述べる講話が、随筆が、なんらかのお役に立てば満足である。

最後は人間の問題

人間に引きまわされる

ヨーロッパに来て、どこかの宮殿、どこかの博物館とまわりながら、ふと考えた。それは、パリで、ナポレオンのお墓にまいり、ロダンの彫刻を見に行く途中であった。——こうして毎日何かを見るが、けっきよくは人間に、しかも今生きてもない人間に引きまわされているのである。あるいはナポレオンに、あるいはロダンに、あるいはヴェートーベンにといったように。自分たちだけではない。毎日あつまる幾万の人たちが同様である。しからば、パリに限らず、どこの都市も、どこの国も、その人たちの存命中、恩恵をうけたと同様に、肉体のなくなった今日まで、その人々に恵まれている。多数の遊覧客は、無形の靈に引きまわされている。——けっきよくは人間の問題である、と。

人間の問題は人格の問題

人間の問題といっても、わかったようであらぬ。人間の何の問題であるか。まさか体重でもあるまい、身長でもあるまい、しからば知識か、才能か、それも無関係ではあるまいが、そのためには言いかねる。

しからば何か。この問いにたいし、何人もそくぎに答えるであろう、人間の問題とは人格の問題である、と。

人格とは何ぞや

それで話がわかったようだが、まだちつともわかっていない。人間という言葉、人格という言葉にとりかえたにすぎない。私は、いつからか、こんな問題について、まとまった話をしたいと思っていたとき、偶然にも、KARAKTERO——“人格”と題するエスプレントの書物を手に入れた。小さい本だが、実に内容の充実したもの、言葉が抽象的であるためわかりにくいところもあるが、体験なしには書かれないと思う点が多い。このごろ手に入れた書物で、気に入ったものの一つである。

私は、これを訳してみようと思ったが、いかにホンヤクしても、世間にありふれた倫理書の訳本のようなものになる。それは残念である。そこで、この書物の言葉からはなれ、一度私のものにして、さらに私の感想をおりませ、まったく新しいものとして、話を進めることにした。

著者は巻頭に言う——

人格とは何ぞや。これを知るもの一千人中百人、しかして、人格を有するもの十人、良き人格を有するものはただ一人のみ。

かくも少なきにかかわらず

人格はパンよりも必要なり。社会の基礎は良き人格の人によって形成せらる。このゆえに、次の三

問題について語らんとす。

かくのべ、その三問題を列挙する。いわく

第一 人格の意義

第二 人格の建設

第三 人格の要素

この三問題から、とうとう数千言、ついに一冊の書物ができ上る。

人格の価値

誰もが自分の幸福を願っている。ただ幸福の内容と、それを得る方法とにまちがいを生ずるところから、あるいは怠慢となりあるいは放縦となる。ほんとうの幸福を教え、それにいたる正しい道を示すならば、誰でもこれを受けいれる。人間は例外なしに、自己の幸福を求めているからである。

今学生諸君が勉強しているのも、かならずや自己の幸福を求めている。中にはそうでなく、国家のため、家庭のために勉強しているといわれるものもある。しかし、それがその人にとっては、自己最高の満足である。すなわち自己の幸福を求めると同一の結果である。

さて、この幸福が何からくるか。これは、実に実にただ一つのものからくる。その一つこそは、私がいま述べつつある「人格」である。

継続の効果

親切な行為をする、その親切をくり返す、それが自然とその人の人格になる。掃除をする、毎日する、何でも清潔にする、これがその人の人格になる。かくして親切な人、純潔な人といったようなものができる。勤勉というのが如きもまったく同様で、毎日毎日の勤勉な習慣が、ついにその人の生涯を勤勉家に仕上げる。

人格には、継続性をもっとも肝要である。気まぐれ、移り気、そんな人からは、けっして良き人格が生れない。物事を継続する習慣の人、それが必ずしも高い人格の人ではないが、その反対、高い人格の人はかならず継続性の強い人であることが真理である。このゆえに継続の意志を離れて、人格は成立しない。

マーデンの警句

マーデン博士が、面白い実例をあげた。ある鉱山の所有者が、これから金鉱をうるために、幾万円を投じた。そうして一年半の後、黄金を見出さず、ついに絶望の結果、売り払ってしまった。さてその新たな所有者は、その先をつづけて掘った。かくて実に意外にも、その第一日に、驚くべき鉱脈を発見した。

著者は、またこの例を引き、実に貴い警句をおいてある。いわく——人生の黄金が、失望の隣りにあ

るかも知れぬ。

たしかに名言である。いまひと息と思うところで止めるものが多い。私が自分の経験について考えても、もつとも良いものは、苦心し苦心し、ほとんど失望しきったとき、その隣りにひそんでいたことを記憶する。

高貴な人とは

高貴な人、それはどんな人であるか。高位高官なるがゆえに、人間として高貴なりとは言えない。自分のよい家に生れた、財産のある家に生れた。こんなことも、人間としての高貴にはまったく関係しない。気品の高い人というのは、人格の高い人である。この人の前ならば、何はなくとも頭がさがる。人格は最高の勲章である。善き品性は、美しい履歴よりも美しい。

履歴は、勲功によってえられるが、人格は品性の教養によってのみえられる。人格的高貴だけが、本当の高貴である。

善き名を与える

誕生と同時に、品性の何物も生れていない。祖先から若干の傾向は遺伝されても、品性それ自身として、何ら決定されたものはない。系図によって人間の貴賤が区別されるものではない。

誕生は美しき名を与え、品性は善き名を与える。

実に面白い言葉である。親はわが子の幸福をいのり、考えに考えて美しい名を与えようとする。またどんな美しい名を与えることも自由である。しかし誠一という男が不誠であり、正義という男が不義を行うことは、いくらでもある。お花さんなるがゆえに、花のごとく美しいともかぎらず、静香という男必ずしも静かに香るかいなか疑問である。

人間としての善き名は、彼の品性のみが与える。誕生は偶然である、品性は断じて然らず。

われわれが誰の子として生れるか、それはわれらの関せざるところ、しかしいかなる品性の人間となるか。これはわれらの責任である。

いかなる人間の子であるか。これはわれわれの責任でない。したがって誇るにも恥じるにもおよばない。貴族の家に生れても、乞食の子に生れても、われ自身の知ったことでない。しかし、いかなる父となるか、これはわれらの責任である。

現在のわが行動は、はたしていかなる父をつくるであろうか。親を誇るよりも子に誇れ。

買われざるもの

世の中はすべてが黄金で支配されているように思う。地獄の沙汰も金次第という。ことに海外の旅でもすれば、黄金の価値を痛切に感ずる。また何か事業をすると第一に金がある。金がなくては、土地も買えぬ、家も建たぬ、何一つ仕事はされない。このゆえに、たれもが黄金を求める。しかし、よく考えてみると、黄金の力のあわれさが分かる。

若干の財宝は誰にも必要であるが、多くの黄金は場合によって危険である。われらの周囲を見わたすとき、黄金によって幸福にされた人間よりも、不幸にされた人間の方がはるかに多い。

黄金は時に「祝福」であるが、さらに多くの場合において「のろい」である。金さえ出せば何でも買えるという。しかしそうではない。黄金ではあまりいいものを買うことはできない。こころみに考えてみる。

黄金で 愛は買わない

黄金で 友は買わない

黄金で 尊敬は買わない

黄金で 幸福は買わない

黄金で 平和は買わない

黄金で 悦びは買わない

しかもこれらのものすべてが、高き人格によって容易に買われる。黄金は使用すれば使用するほど少なくなるが、人格は使用すれば使用するほど高くなる。黄金はぬすまれない。

黄金はぬすまれるが、人格はぬすまれない。

黄金以上のもの

黄金の力で何でもできるようであるが、黄金はなくとも、人格の力だけで、黄金がなしうる以上のこ

とができる。

高い人格から自然に現われる微笑

その人の心地よきお辞儀

その人の温かい心にみちたる握手

その人の心からなる助言

その人の強いはげまし、また慰め

これらは人間の生涯をも支配する。絶望の人に命を与える。さびしい心に光明を与える。

こんな貴い仕事は、高い人格だけがなしうる。

外観か、心情か

お金をたくさん持って、立派な服装をしていると、ずいぶんもてることがある。さかんに歓迎されることがある。しかしこれによって、人の心をとらえることはできない。

美しい外観は門のトビラを開かせるが、美しい心情は心のトビラを開かせる。

交際場で、さっぱりした服装外観が、社交界にいくたの知人をつくるかも知れないが、本当の友人はつくれない。

美しい外観は知人をつくり、美しい心情は友人をつくる。

婦人など容貌がよいということは、大きい資産である。そうして誰もがこれを願ひこれをうらやむ。